

韓国普覚国師の死生觀

——普覚の碑銘を中心として——

朴 相 俊

一

高麗普覚は生死をどのように受容されたかを検討したい。これは普覚の思想の全般を研究することではなく、また彼の著述全体からみる死生觀を説明することでもない。ただ普覚の碑銘からみた死生觀のみを、従来放置されてきた精神史の立場から照射するのである。「生死をみる教義觀」「対世間觀」「対内照觀」の三論点を設定したい。

まず生死をみる教義觀についての検討から始める。生死の縁起を原点として釈尊が発見した悟りという自己発見のことを「原点の発見」ということにする。また普覚が自分なりに発見した悟りということを「原点の再発見」と命名する。ここで釈尊と普覚が追求した共通関心の部分は生死の縁起という原点といえよう。

普覚の悟りは次のようであった。丁酉（高宗二四、一二三七

年）無住庵で「生界不減 仏界不増」という公案を参究し参禅したある時、突然に悟りがあつて、「吾今日 乃知三界如幻 夢見大地無纖毫礙（碑銘）」という悟道頌を残した。この悟道の深淺とは関係なくここで表現されたことのみをみて釈尊が自分の心を発見したことが同じように普覚が自分の心を発見したと言つても言い過ぎではないと思う。

ここにおいて自分が想い描く理想に向けて日常的な次元から非日常的な次元へ飛躍ないし深化したと理解することもできる。普覚が再発見したのは生死の縁起という原点の発見のように時間と空間の息づまるような、束縛を離れて意識の外に無限の可能な精神世界を発見し迷ひ煩惱がなくなつたといえよう。

その結果、その喜びの精神現象の表出としてそれを悟道頌に表現したと考えられる。

それはその基点以前まで生界不減 仏界不増という思想を

知っていることを彼の精神爆発（悟り）によって、積尊が体験したことを彼なりに追体験したといえよう。ここで体験したことは精神爆発以前に知っている解悟と体験以後の得悟ということとを明瞭に区別しなければならない。普覚の得悟というのは生死の原点の再発見であり、勿論得悟というのは積尊が得悟した生死縁起の原点の発見をいう。ここでその解明のために普覚が臨終の時に試みた、ある僧との問答を紹介する。

釋尊示滅於鶴林。和尚歸眞於麟嶺。未審相去多少。師拈拄杖卓一下云。相去多少。（碑銘）

というように、積尊が鶴林で示滅され和尚は麟嶺で帰真されるのであるが相互に多少を去ったことに疑いが生ずる。これに対して普覚は相互に多少を去ったというのである。

上述するところによって積尊の死と普覚自信の死が同じである（同量）ことをあらわしている。それは生界不滅 仏界不増という思想を貫通している骨格でもある。生死の原点を再発見したら積尊とまったく同じであった、というのが普覚の死生観の教義的観点であり、とくに注目しておきたい。

二

次は、対世間観である。普覚の原点の再発見を基点にそれ以前と以後の彼の思想を比較考察しよう。まずその以前には、「年甫九歳。（略）有時。危坐盡夕。人異之。」（遊歴禪肆。）

「包山寶幢庵。心在禪觀。（碑銘）」というように参禪を中心に修行したことがわかる。

その後、丙申（高宗二三、一二三六年）秋に蒙古兵が侵入した時、普覚は戦乱を避けようと文殊菩薩の五字呪を念じ、感応あることを期待したのである。その時、忽ち壁の間から文殊菩薩が現身して「無住庵」といった。そして普覚は避難の地として妙門庵を経て無住庵に行ったのである。このことについては宗教的側面からみると凡人が対冥界（文殊菩薩）に対する宗教的行儀であり、生命の本能的行儀ともいえよう。それに対する宗教的感応をも窺える。勿論、社会的側面からみると客観的批評や非難も可能であり、ここで理想と現実の矛盾や乖離が発する。

その一年後、無住庵で過去の煩惱の中で喘ぐ自身を自覚と共に自己を発見したことが大きな意味を持っている。これが新しい生命の誕生ともいえよう。

そして高麗忠烈王は「請行闔國尊師之禮。師上表固讓。上從遣使。牢該至三。仍命上將軍羅裕等。冊為國尊號圓怪冲照。（略）師素不榮京輦。又以母老。乞還舊山。辭意甚切。（碑銘）」というように王は普覚国師が自分の周りにいる事を願ったが、普覚は世間的な名誉と名利もそれほど重要視しなかったし、出家沙門として親族（母）の縁を切るという慣例をも無視したのである。ここで推察されるのは当時の僧侶として規

則を破ることを批難されたと考えられる。ここに普覚の対世間意識と自己認識の特色を見出すことができる。

したがって原点の再発見以後の普覚は世間的な結縛を離れ、僧侶生活の慣例にも無執着という思想が見られる。これが彼の二番目の特色である。

三

最後に対内照観である。臨終時の禪問答には普覚の死生観が集約して表現されている。

「伊麼則。今古應無墜。分明在目前。師又卓一下云。分明在目前。」

「和尚百年後。所須何物。師云。只遮箇。」「又有僧問和尚。在世如無世。視身如無身。何妨住世轉大法輪。師云。隨處作佛事。」

（碑銘）

というように一般的にみえる死の直前の反省、懺悔ないし願望などより「現・今・即・絶・対」という思想が濃厚にみられる。このように死に対する恐れもなく、死後の未知の世界に対する恐怖からくる忌避意識も全然みられない。これは死後の世界・存在に対する確信と自信の思想的淵源の表出であった。

または生死に対する対応を指摘したい。普覚の死生観を通じて当時韓国仏教の時代精神の死生観の底流の本音を知ることができる。

三つ目に「分明在目前」「只遮箇」「隨處作佛事」が彼の死

生観を圧縮して表現した思想である。

以上の考察で明証された三論点の解明をまとめて結論とする。生死の原点の再発見は、釈尊とまったく同じであるというのが普覚の死生観である。原点発見以後の普覚は、世間的な結縛を離れ、僧侶生活の慣例にも執着しないという思想が見られるのである。三つ目に生死観の根源を「分明在目前」「只遮箇」にみることができ。また生死の焦点を「隨處作佛事」と表現した。従って表層から基底に向けて生死の機能的側面を推察した結果、普覚は「生死体得の真人」であったと考えられる。ちなみに私は特色ある教義的理論も重要なことであり、その理論の体験から表出される普覚の死生観と共に臨終直前の余裕・安楽そして無心は我々に対する死へのメッセージであると思われる。

おわりに高麗禪僧の代表的な普覚が如実に示す死生観の実例を通じて、当時韓国仏教禪僧の死に対する潜在意識が顕現された。このように韓国仏教精神史の立場からみる死生観の研究は、韓国仏教精神史の深層を新たな側面からとらえようとする試みなのである。

1 崔南善編「普覚国尊碑銘」『三国遺事』瑞文文化社、一九九三、六六頁。

〈キーワード〉 生界不滅 仏界不増、隨處作佛事

（佛教大学大学院）